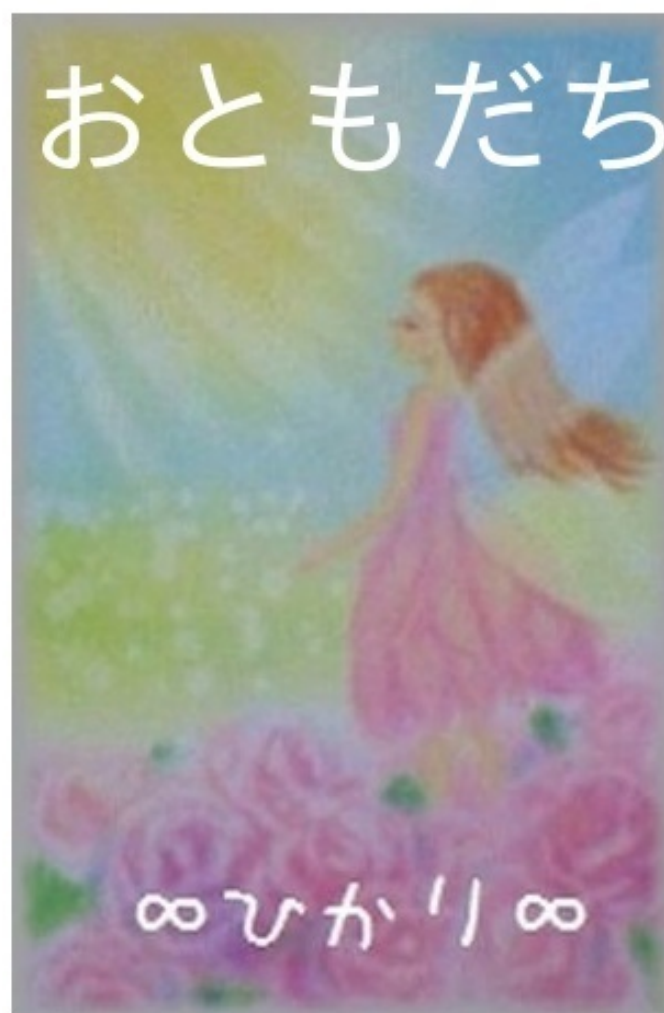


言葉の秘密の 守り人（3）



上村ひでみ

春がきました...

それはそれは 晴れやかな 心地よさです

いつもの 森も なんだか ウキウキと 新しい 緑の葉っぱや 可愛い お花の つぼみたちが 「見て～ 見て～ ♪」 とはしゃいでいます

ふたごの マリーと ベティは 朝から 早く 森に 行きたくて 着替えや 少しばかりの お手伝いを 慌てながらしています

(ノ^^)八(^^)/

そんな 二人の ウキウキな様子を 優しいお母さんが 幸せそうに眺めていました...

「はい... 今日も なにか 素敵な もの 見つけてきておいでね... (*^_^*)
バケツに 半分くらいで いいからね

頂くときには いつものように
森の恵みに お礼を 言って頂いてくるんですよ
(*^_^*)b」

と いつもの 小さなバケツをお母さんが マリーに 渡してくれました♪

そして 大好きな 美味しい サンドイッチを ベティの手に持たせてくれました

二人は 「お手伝い、いってきまあ～～すo(^^o)(o^^o)」

と 元気に宣言しました

二人の 後ろから 白い大きな 犬
ジョンがついて行きます

後ろを振り返り お母さんと 目を合わせます

「ジョン...二人を頼みましたよ...いつもありがとう...(*^_^*)」お母さんは小さく言いました

ジョンは静かな黒い瞳で...喜んで...と伝えました♪

森は春の生き生きとした命に満ち溢れていました

双子はこの空気の中に入るといつもにもまして
嬉しくてたまらなくなります

森の入り口の
あの空気のかわるカーテンをくぐったとたん二人は

「わあ~~~~い
わあ~~~~い
ゞ(≧▽≦*)ゞ(≧▽≦*)ゞ」
とはしゃぎだしました

マリーはバケツダンスを踊りはじめました♪

頭にバケツをのせてクルクル回りながら～

「バケツのなかにおかしをいれて～♪たくさん♪たくさん♪食べましょう~~~~
みんなで一緒に食べましょう~~~~♪」と歌います

o(°▽°*o)(o*°▽°)o～♪

ベティはサンドイッチを頭に載せながら両手を横にひらひらさせて蝶々みたいに踊り始めました～

そしてマリーと一緒に

「おかし～♪おかし～♪
食べましょう~~~~♪
お腹いっぱい食べましょう♪~~~~♪」

と歌い始めました

o(° ▽° *o)(o*° ▽°)o~♪

歌いながら

踊りながら

森の中へのいつもの道をいきました～

仲間達が二人に気付いて

わらわらと集まりました♪

子リスや子グマや野ネズミさん達です

一緒に大好きな原っぱをめざしながら歩きました

いつものように大好きな大きな木のある緑の原っぱに近づくと...

原っぱの真ん中に誰かがぺったんこ座りをしていました

高い木々からキラキラの光のシャワーが原っぱの真ん中のその誰かに降り注がれていました

...

ピンクやブルーや金銀に輝いたキラキラがあんまり綺麗なので

双子は大きくお口をあけたまましばらくその奇跡みたいな景色を首を傾げながら見ていました

その誰かはよくみると

小さな女の子でした

黒い髪の毛が肩でちゃんと切りそろえられていました

両手を地面にぺたんとつけて頭をユウラユウラと左右に楽しそうにふっていました

気がつくと双子も体を左右にふっていました

いつの間にかそうなっていて

二人は 顔を見合わせて 笑ってしまいました

そんな二人の クスクス声に 気がついたのか

女の子は 振り返りました

大きな瞳が 二人をみました

二人は もう ワクワクが とまりません

(ノ^^)八(^^)/

いっきに 走って 女の子の そばまで いました

そして おんなじように ぺたんと 座り

その キラキラシャワーを 受けながら 女の子と おんなじように

ユウラユウラし 始めました

もう 楽しくて～ 楽しくて～ たまりません

o(^^o)(o^^o

そして 二人は ケラケラと 笑い出しました

その声は 三人になりました

三人で いっぱい ケラケラ しました

「はあ～ 楽しいねえ～ o(^▽^)o」

「うん～ 楽しいねえ～ (^O^)」

o(^^o)(o^^o きゃはきゃはきゃは♪

「わたし マリー」

「わたしね ベティ」

「あなたは だあれ？ おしえてくださ～い」

二人は笑顔でたずねました

「はな... (^o^*)」

と女の子は答えました...

「はな♪ はな♪ はな♪

わあ～ ム(≧▽≦*)>

いい～ かわいい～

はな～♪ はな♪

はな♪」

「あ あの子は ジョン だよ～ 白くてね 優しいよ～

お友達になってあげてくださあ～い(^O^)/」

と ベティは いいました

女の子は ジョン を 見つけると じっと 眺めながら 小さな 手のひらで おいでおいでをしました

すると ジョン は ゆっくりと 近寄り...

女の子の 顔の前で 頭を 下げました...

女の子は ジョン の 頭を 静かに なでて

「ジョン... ジョン... ジョン...」 と 嬉しそうに 呼びました

双子は すごい 嬉しい 気持ちになりました

もう どうして いいのかわかんないくらい 嬉しくて 気づいたら きゃあきゃあ いいながら

ジョンと 女の子の 周りを 走り回っていました♪

「お友達～♪

お友達～♪

はな～ は ジョン～ と お友達～♪

マリーも ベティも お友達～～～♪

ム(≧▽≦*)> ム(≧▽≦*)> 」

二人は作ったばかりの歌を歌いながら踊り始めました♪

女の子はジョンをなでながら そんな二人をケラケラ笑いながら見ていました (*^_^*)

カサカサカサ...

と足音がしました

薪や大きな袋を担いだ男の人が目の前に現れました

女の子とよく似た黒い瞳でした

すごい笑顔でニコニコ近づいてきました...

そして女の子をひょいと肩に乗せました

そしてジョンの頭をなでて

二人においでおいでをしました

マリーとベティーはワクワクしながら近づきました

男の人はポケットからきれいな色のまあるいお菓子を出しました

二人の手のひらにのせてくれました

そしてすごいニコニコしながら二人のほっぺたをそっとなでてくれました

ゆっくりと立ち上がると森から出る方向に歩いていきました

肩の女の子は振り返りながら手をふってくれました

二人は

「またねえ～

またねー(*^ー^)/」と手をいっぱいふりました

女の子はこくんとうなづきました～

つづく...

その日の双子のはしゃぎようたら もう... たいへんです

o(^▽^)o

お母さんのまわりをクルクル回りながら 交代ごうたいに 森で 出逢った女の子のことを 身振り手振りで話します...

ひとしきり話して 落ち着いた頃...

お母さんはレモンのお茶を飲み頃にさまして二人に持たせました...

そしてゆっくりとたずねました

「はなちゃんはどんな格好をしていたのかな？」

「ええとねえ～

ゞ(´ー`) ええとねえ～

あれえ～ 青い服着てたかも～

あんまししらなあい～」と ベティ(=^▽^=)

「なんかね 深い青い色なの 初めてみる色なの～

赤いボタンがついてたよ～」

「お父さんみたいな人がねえ～ おんなじ色の服着てたよ(^O^)/」と マリー

「ありがとう(*^_^*)

よかったねえ... お友達ができたねえ...」

「うんo(^▽^)o お友達～ ♪」

「うれしいなあ♪ ゞ(´ー`)」

二人は足をブラブラさせながら お茶を飲みました♪

ジョンが玄関をみました

二人はすぐにわかりました

ジョンはお父さんが家の近くまでくるとわかるみたいで いつも ドアの方をみます

二人はいまかいまかと待ちました

ドアの前でほこりを払う音がしました

「ただいまあ〜」

大好きなお父さんが帰ってきました

二人はびょーんとお父さんに飛びつきました

三 (/^^)/

三 (/^^)/

そしてケラケラ笑いながら

やはり森でのお話しをしました

お父さんはお母さんのように二人がすっかり話終わるのをニコニコしながら待っていました
(*^_^*)

そして二人にたずねました

「その女の子は言葉を話したのだね... 名前を... はな... といったんだね？」と

マリーは「うん♪ はなちゃんだよ」といいました

「お父さんのような人はなにも言葉を話さなかったんだね？」

「うん (^O^)/ すごいニコニコわらっててね〜 お菓子くれたよ」とベティは言いました

そして二人は大事そうにポケットからそのお菓子をだしてお父さんにみせました

あまりにも綺麗な色なので甘いい香りがするけど食べずに見せたくて二人は持っていました

「ねえ〜 綺麗でしょ〜 o(^▽^)o」

お父さんとお母さんはそのお菓子をしばらく眺めて目をあわせて微笑みました

そしてお母さんのこさえてくれた美味しいお食事をのんびり食べました〜

「さてまだ眠くないかなあ～」とお父さんが二人に聞きました

「眠くないも～ん(^O^)/」

「眠くないも～んo(^-^o)」と二人は一緒に答えました

「では二人にお話しをしてあげようね♪

遠い... 遠い... 知らない国の お話しだよ...」

昔... 昔...

ある国の ある小さな 村に 赤ちゃんが 産まれました...

その 赤ちゃんは 産まれた時から 耳が 蓋されているような 形をしていました
不思議な形でした

耳の 穴がないのです

綺麗に ふさがれていました

村の人たちは 赤ちゃんを見て まずは 驚きました

そして すぐに みんな 綺麗な衣装に着替えました

村じゅうの 人が 綺麗な衣装を着ました

そして 赤ちゃんを 白い綺麗な 布に 包み 少し 高い 赤い布を敷いた台に 静かに 寝かせました

そばには お母さんが 横たわっていました...

とても 綺麗な 顔をした お母さんでしたが

もう 息をしてはいませんでした...

村じゅうの人が静かに二人を見守る中...

村の長老様がやってきました

あごに白くて長いひげを蓄えた細い優しい目をしたおじいさんです

台の上の赤ちゃんと静かに眠るお母さんを交互に見て...

長老様はまずお母さんに静かに手を合わせました

胸の上に重ねられたもう冷たくなっている手の上に ご自分の手を乗せて何かを話しかけていました

そして手を離すと今度は赤ちゃんを抱き上げました

そして静かに白い布をはずして裸の赤ちゃんの全身を柔らかくなでました

そしてまた白い布を巻いて一緒に連れてきた若い女の人に赤ちゃんを託しました

そして長老様は言葉を使いました

「村の皆さん...

集まってくださり ご苦労様です

今日ひとつの命がわたしたちのもとに遣わされました...

皆さんおひとりおひとりとおなじように尊い命です

そして若いお母さんはご自分の命をかけてその尊い命を守りました...

今私はその勇気あるお母さんに感謝の祈りを捧げさせていただきました

そしてお母さんが命がけで守った尊い命をたしかにお預かりしましたとお知らせさせていただきました

皆さん... 見てくださり わかったように

この子は神様からの贈り人です

耳をふさぎわたしたちの言葉ではなく魂の音を聞き取るように産まれてきてくれました

ありがたいことです(*u_u)

不自由な暮らしや寂しい思いをさせないように

わたしたちみんなで見守り慈しんでいきたいと 思います...

私の孫娘がこの赤ちゃんのお世話をさせていただきます

どうか皆さんの優しい気持ちをいつもこの赤ちゃんに向けていてあげてください...

産まれたときから

お母さんと違う世界で生きていく...小さな命 なのですから...(*u_u)」

長老様は 静かに 頭を下げました

村のみんなも 静かに頭をさげました

みんなの目にはキラキラした涙が流れました...

おやおや ベティの頭がゆらゆらしはじめました...

お父さんは そっと ベティを抱っこして ベッドに寝かせました

お母さんは マリーを抱っこして ベティの隣に寝かせました

二人はいつものように

開いたベティの手のひらに握ったマリーの 小さなお手手を のせて...

夢の世界にはいっていきました...

つづく...

目を覚ました とたん...

二人は 顔を見合わせて うなずきあいました...

「早く行かなきゃねえ～
待ってるかもだねえ～」
(/▽/)きゃはあ～」

そして 弾みをつけて
びよーんと 起き上がりました

せっせかせっせかとお着替えをして～
朝のお手伝いを ちょびっとして～

お母さんのまわりを ウロウロとしながら

バケツを 渡してもらえるのを
いまかいまかと 待ちました♪

そんな二人の様子を 楽しみながら
お母さんが 言いました

「さて 今日 森で何か 探してきてくれると お母さん 嬉しいなあ♪
お友達にも よろしく 伝えてね (b^-°)」

そう言うとお母さんは いつもの 小さなバケツと
いつもより 少し 大きな サンドイッチの 袋を 渡してくれました

「これはね お友達のためですよ (*^-^)*
わかっているよね
優しい言葉を選んで 使いながら そっと 渡してあげるんですよ」

「わあ～い \ (^_^) /」
「はあ～い (^O^)/ 渡すう～♪」

そして二人とジョンは風のカーテンを 通って... いつもの森へ 入っていきました...

昨日の原っぱには...

「きゃあ～ やったあ～ (^O^)

はなちゃあ～ん」

ベティが見つかるなりぴょんぴょん跳ねながら 走っていきました

そして女の子の前で立ち止まると 嬉しすぎて もじもじしました

くすぐったいような感じがしてきました

女の子は ニコニコ可愛く笑いながら 小さな お手手でおいでおいでを してくれました

ベティは「きゃあ～」といいながら女の子に そっと抱きつきました...

むぎゅ...

むぎゅ...

女の子とベティは まあるくなりました ...

なんだか海の中にいるみたいに ゆうらゆうらと体が揺れました...

静かな音が心に 溢れてきました

「はなちゃあん

だあいすき (=^▽^=)」ベティは 言いました

「だいすき...」女の子も 小さな声で 言いました

マリーと目が合うと また女の子は おいでおいでを してくれました

マリーと女の子もまあるくなりました
お花畑にいるみたいな 甘い 香りがしてきました ...

「はなちゃん だあいすき...」 マリーは 言いました (*^_^*)

「だいすき...」 女の子も 言いました

三人は 一緒に まあるくなりました

そして 仰向けに 寝ころびました

緑の 天井を 見ながら その キラキラした 木漏れ日を 目を 細めたり しながら 楽しみました

三人は 手を 繋いだり 離したりして 遊びました

そうしているうちに 気がつきました

女の子の 右手の 指は 自分たちと すこし 違っていました
三本だけ 小さな指がついていて
手のひらは 少し まあるい 形をしていました

とても かわいい形でした

「かわいいねえ～ ム(´ー`)」

二人は かわいさのあまり もじもじしながら その お手手を さわりました

女の子は ニコニコしながら されるがままに していました

「あ あのね はなちゃん...

あのね ... えとね...

一緒に これ 食べませんか？

たくさんね

お母さんが 作ったの

だからね

一緒に 食べたいね

o(^▽^)o」

マリーは 女の子に 優しく 言いました

女の子は 開かれた 布の 上に あらわれた サンドイッチを じっと 見つめました

不思議そうに じっと 見つめました

そして ニコニコ 笑いながら

「ありがとう (*^_^*) 」 と 小さな声で 言いました

二人は 嬉しくて

「やったあ～ (ノ^^)八(^^)/ 」

と 叫びました

「一緒に 一緒に たべましょねえ～♪

おいしく おいしく たべましょねえ～♪

ゞ(≧▽≦*)> 」 と 歌いはじめました

女の子は 小さな手を 顔の前で 合わせました

小さく 頭を ちょこんと 下げました

「頂きます... 」

そう いました

二人も いつも どの お祈りをして

三人一緒に お母さんの こさえてくれた サンドイッチを モグモグ 食べました

時々 二人は 女の子の 顔を見ました

嬉しそうに モグモグしている かわいい顔でした

二人は やっぱり 嬉しくなりました

o(^^o)(o^^)o

お腹が いっぱいになりました

そして また 原っぱの 上で ゴロゴロしました

ドングリを 飛ばしたり

葉っぱで いろんな形を 作ったりして 三人で 遊びました

カサカサカサと 足音がしました

また ニコニコ顔の お父さんみたいな 人が やってきました

双子を 見つけると ますます ニコニコ顔になり

また ポケットから 丸い お菓子を 出して 二人の 手のひらに のせてくれました

女の子が その 男の人に 何か 知っている みたいでした

すると その 男の人は 二人に 手を 合わせて 頭を 下げました

そして 女の子を ひょいっと 肩に 乗せて ... ジョンの 頭を 撫でてから...

森の 出口に 歩いて 行きました

女の子は 振り向いて 手を ふりました

「またね～ (^O^)/」 ベティは 飛び跳ねながら いいました♪

そして 二人で いっぱい 手を 振りました(ノ^^)八(^^)ノ

女の子がとてもかわいい顔をして お母さんの サンドイッチを 食べたことを 二人は 顔真似をしながら 話しました

その姿が 可笑しいので お父さんと お母さんは ケラケラ笑いました

そして 四人で ケラケラ笑いました

「さて... お友達が できた お姫様たち？
お話しの 続きが 聞きたいかな？」

とお父さんは 言いました

「ききたあ〜い (^O^)/
ききたあ〜い (^O^)/」

「よしよし... (*^-^)* では 話そうね...」

小さな村は 深い 森の 中に ありました

畑には 色とりどりの 季節の野菜が 実り...

近くには 小さな 滝と 綺麗な川がありました...

その川は 神様の山から 流れてくる とても 神聖な川でした

村のみんなの命の水として 大切に 扱われてきました

毎年 ... 一度だけ

その神聖な川は 何日も続く 大雨と落雷で 姿を 変えます

荒れ狂う 海のようになります

畑は 全部 もとの大地にもどります

家は 高い足をつくっていますが

流される家も ありました

(*u_u)

神様からの 贈り人が 遣わされた年

大雨は 降りませんでした ...

その次の年も

また 次の年も...

畑も 家も そのまんまに みんなは 安心して暮らしました

長老様の 孫娘が お世話して 大切に育てた 神様からの 贈り人は
六歳になりました

白い透き通る肌に 真っ黒な キラキラと光る 瞳を持ち
いつも 真っ直ぐに 長い時間 ひとつの物を じっと眺めていました

耳が 聞こえず

言葉も 話しません

みんなは いつも 声をかけ 話しをしてくれます

そんな みんなの 顔や 姿を じっと 見ながら

こくん ... こくん ...とうなずき

ニッコリと 笑い 最後に 必ず 両手で 手を 柔らかく 握るのです

そうされると 誰もが 暖かい 気持ちになれました

(*^_^*)

みんなは 神様からの 贈り人を
「お花様」と呼びました

花のように 可愛らしいからです

つづく...

お花様は 村中 いろんな 場所に 連れられて いました
まだ よちよちあるきの時には 抱っこされながら...

村には いろんな場所に
神様が 宿ると されている 大きな木や 大きな石などがありました

その 近くまで くと お花様は 両手を 伸ばして さわりたがります

ひとしきり 触ると なつかしように 穴のあいていない その ふさがれた耳を 木や 石に あてます
そうして しばらく そのまんま 時を 過ごします

みんなは そんな お花様と 懐かしい 何かとの 時間を 「大切な時間」だと 知っているように...
愛おしそうな 瞳で 眺めながら 一緒に 時間を すごしました (*^_^*)

お花様は 小鳥たちや 動物たちとも 同じように 過ごします

また お花や 野菜などとも 同じように します

村の人たちとも 同じように します

お花様にとっては 人も 人以外も みんな 同じなのです

みんな...大切な 家族... なんです

お花様は 満月の夜
お月様を ながら
ポロポロと 涙を ながします

涙を 流しながら
微笑んでいるのです
長老様の孫娘は そんな お花様を 膝に 抱きながら 聴こえない耳に 優しく 子守歌を 歌うのです...

「アウアイア～～

アウアイア～～

大きな川の その奥の 静かな お部屋で 眠りなさい～

あなたの心に 届けましょう～

わたしの心を 届けましょう～

緑の森の その奥の 静かな お部屋で 遊びなさい～

あなたの祈りを ききましょう

私の祈りを 届けましょう～

真っ暗闇の 空の奥～

みえない お部屋を 見つめましょう～

あなたの 生まれた 音 でしょう

わたしと おんなじ 音 でしょう～」

孫娘の 声は 弓のように 細く しなやかで 美しいので 空気を ゆるやかに 揺らしました...

お花様は いつのまにか 腕の中で 静かに すやすやと 眠りの 世界にはいりました

その 森の ずっと先には たくさんの 村が ありました

また その ずっと先には 大きな 町も ありました

そこでは たくさんの 人や 物が あふれて いました

人たちは 少し くすんだ 衣装をきて 火花を ちらしたような 揺らぎを まきちらして いました

人と人は 選ばない言葉を 平気で 使いながら かかわり合っていました

時間が 慌ただしく 動いていました

誰もが 自分の中を ゆっくりと 抱きしめることを 知りませんでした

そして 誰もが 何か ザワザワとした 足りない ものを 探したいような 気持ちをもっていました

そして 足りないものが どこにあるかを さがすうちに

それは 誰かが 余分にもっているんだと思うようになりました

そして その 余分を 欲しいと思うようになりました

そして 「ください」ということを 飛び越して 何も言わずに 奪うようになりました

奪う為の さまざまな 方法を見つけていきました

そうやって いろんな場所 で 火花は 広がっていきました

みんな 「足りないもの」が 欲しいだけなのでした

言葉を使うことを いといました...

手を握ることを

いといました...

微笑むことを

いといました...

小さな村は 深い森に 守られていました

そこは その 世界の 真ん中に ありました

おへそのような 場所でした ...

リンゴの芯のような 場所でした...

いつか人々が「足りないもの」の秘密を知りたいと思うようになる その時まで その村は大切に守られていくのです

おわり

*****.

「お父さん...

お花様はどうしてお月様をみると涙がでるの？
どこか痛いの？」マリーが言いました

「そうだね...
マリーはどこか痛いとお涙がでるんだね (*^-^)」

「うん そうなの...
そしてね

えとね... リスさんがね ケガをしてたくさん 赤い血がでたときもね ドキドキってしてね
涙が出たよ...」

「他には どんなときに 涙がでたかなあ (*^-^)」

「う...んとね...
あ 迷子になってた ベティが 大きな木さんの そばで 眠っているの 見つけたときね

嬉しくて～ 嬉しくて～
そんなときも 涙でたよ o(^▽^)o」

「そっかあ～ そうだね～

あの時は お父さんも 涙でたよ (*^-^)」

そういって お父さんは 二人の ほっぺたを なでました

「お花様の 涙は どの涙 だったのかなあ...
二人とも お花様の 気持ちに なって みたなら わかる かもしれない ねえ...
(*^-^)b」

お父さんとお母さんは 顔を見合わせて 優しく 微笑みました

次の日の朝が やってきました

双子は もう お友達に 早く 会いたくて、 会いたくて、 体より 心が 先に 走り出していました(*^-^)
b

風の カーテンを 通り、 森に 足を 踏み入れたとたん
マリーは 心臓が キュンと 痛くなりました ...

「いたあ〜い (ノ_・。)〜」

「マリー ... どしたの？ 痛くなったの？
はなちゃんなの？」

ベティが ききました...

二人は ドキドキして きました...

マリーは 胸を おさえながら 一生懸命 走りました...

いつもの 原っぱには 横になっている 小さな 女の子が 見えました...

「はなちゃあ...ん Y(>_<、)Y」 二人は しゃがみ込んで 女の子の 顔を 覗き込みました
どこからも 血は でて いません

いつもより青っぽい顔で唇もしろっぽくて...

触るのが怖いくらいです

マリーは勇気をだして女の子の鼻のところに耳を近づけました

「スースーしてるう... (;_;)」

「ほんとお？

あ... スースーしてるう (ρ_-)o」

二人は少しドキドキがやみました

そしてしばらく女の子をじっと眺めていました...

「あのね... お母さん呼んでくれる？」マリーは言いました

「呼んでくれるよ (^O^)/ ジョンもいく？」ベティは元気にいいすぐに走り出しました

ジョンは女の子の髪を少しクンクン嗅いですぐにベティを追いかけてました

「ジョン～ベティとがんばれえ～」

マリーは女の子の髪を撫でたくなりました

黒いツヤツヤ光る綺麗な髪でした

「綺麗～」

あ... あれ？」

女の子の耳は少しばかり変わった形をしていました

まるで蓋をしているみたいに耳の穴がないのです

「わあ... お花様とおんなじみたい～」

(*^_^*)

「でもはなちゃんはお話できるも〜〜ん」

(*^ー^)/なでなで〜

「かわいい〜 お手手とかわいい〜お耳〜o(^▽^)o ♪」 マリーは歌いはじめました♪

つづく

思いつくままに歌っていたら...

ベティとジョンとお母さんの姿が見えてきました (=^▽^=)

「マリー... ありがとうね (*^_^*)

この子がお友達のはなちゃんなんだねえ...

かわいいね...」

お母さんはまず女の子のおでこと首をそっと触りました

両手でそっとほっぺたを挟み込みしばらく顔をながめてから近くに落ちている枝と石を拾い上げて何かを作り始めました

そしてそっと女の子を抱き上げました...

「さてはなちゃんをお家のベッドで休ませてあげてもいいかなあ? (*^-^b)」

「わあ~い

休ませてあげたあいゞ(≧▽≦*)>」

「あげたあい~(≧▽≦)ゞ」

二人は嬉しくなりました ♪

ぴょんぴょん跳ねながらみんなでお家に帰りました。

帰り道でいくつかの葉っぱをお母さんはマリーに頼んで摘んでもらいました

マリーはお薬になるいくつかの葉っぱとそのつみかたをお母さんから教えてもらっていました。

丁寧に感謝して摘むと葉っぱはいいお薬になると教えてもらっていました

o(^▽^)o

だからマリーはいつも「ありがとう (^人^)」を笑顔で言ってから葉っぱを丁寧に摘みました

女の子はベッドの端っこでスースー小さな寝息をたてて眠っています...

手をそっとさわるととても冷たいのでマリーは少しドキドキしました

なぜならいつも パーに ひらいた ベティーの手のひらの中に 自分の グーの手を入れて 眠るとき...

ベティーの手は あったかいからです

お母さんは 納屋から いくつかの 道具を 持ってきました

それは とても いい香りがしました

お母さんは マリーに 「お手伝いできるかな？」と ききました

「お手伝いしまあす(^O^)/」

とすぐに こたえました

ベティは ジョンにもたれて 眠ってしまいました...

ベティは あっという間に 夢の世界に入りました...

そこは なんだか 懐かしいような 感じがしました...

薄い紫色のお花がたくさん咲いていました

ベティは 体が ふんわり 地面から 浮いていました...

「わああ... いい気持ちい o(^▽^)o」

「あはあはあはあは (=^▽^=)」

となりで 誰かが 笑っていました

はなちゃんでした

はなちゃんも ふんわり浮いていました

いつもの 青い衣装ではなくて 黄色い ワンピースを着ていました

「はなちゃん～ \ (^_^\) / 」 嬉しくて 声をかけました

はなちゃんも 笑顔で 「ベティちゃん～♪ \ (^_^\) / 」と こたえてくれました

二人はふわふわ遊びをしながらまわりの景色をながめました

お花畑の向こうに黄色く光るきれいな場所がありました

二人はそこまでふわふわ遊びをしながら飛んでいきました

黄色いひかる場所までくと

まあいお皿が綺麗な台の上においてありました

お皿の中には水色のお水が入っていました

キラキラしていてとても綺麗です

二人はそばまでいきました

そしてお水を覗き込みました

そこには深い青いいろに白いふわふわした綿菓子みたいな雲が巻き付いているまあい玉が見えました

「わあ～綺麗な玉だあ～(≧▽≦)」

「綺麗いい～o(^▽^)o」

二人はその玉が大好きになりました

お水にそっと手をつんつんしてみました...

すると何か鈴のような音が聞こえました...

そして川に入って水遊びするときに顔ごとお水に深く潜ったときみたいな不思議な音が聞こえました～♪

二人はその綺麗な玉がどこか遠い場所で生まれて大切に大切に育てられている命なんだとなぜだかわかりました...

そこには いろんな種類の 命が 産まれて 育っていて いろんな 遊びを しているんだと わかりました

二人は かなり ワクワクして きました

そうして その 青い玉に いてみたくて たまらなくなりました...

たくさんの 命の中に 混じって 一緒に 遊びたくて たまらなくなりました

一緒に 歌ったり ♪ 笑ったり ♪ 泣いたり ♪ 踊ったり したくて たまらなくなりました

二人は 互いに 同じ思いを していると なぜだか 知っていました

そして 目をあわせて それを 確認しました

二人は 飽きる ことなく その 青い玉を じっと 見つめました

そして いつか その場所 に 共に 立ち
一緒に 遊ぶことを 約束しました

(*^o^)(^-^*)

お・や・く・そ・く...

しゃりりらり〜ん♪

鈴の音が 響きました...

ベティは 目を覚ましました...

いつの間にか

いつもの ベッドには マリーと はなちゃんと ベティが 三人 並んでいました...

ひゃああ〜 ム(≧▽≦*)> ちあわせー♪

ベティは ベッドの中で 小さく 足をパタパタしてしまいました ♪

ヒソヒソヒソヒソと 話し声が 聞こえましたが...

ベティは また ウトウトと 夢の世界に 引き込まれていきました...

「みんなで一緒に 夢の世界で 遊ぶもんねえ ♪」 ブツブツ 思いながら... 静かに 瞼が しまっていました...

ヒソヒソ声は

テーブルに 座って お話ししている

三人の大人達でした

つづく...

三人は不思議な様子なのですが...とても懐かしそうな穏やかな微笑みを交わしながら暖かいカップでハーブのお茶をのみながらお母さんのこさえたお料理を食べていました

どんなふうに不思議な様子なのかというと
話しをしているのはお父さんとお母さんだけなのです

お父さんとお母さんは手のひらをいろんな形に綺麗に動かしながら言葉をはなしています

そしてはなちゃんを森に迎えにきていたあの優しい人は...言葉ははなさずにとても早く美しく手のひらや指の形を変えていくのです

三人は時々笑ったり...少し泣いたりしながらいつまでも...いつまでも...懐かしそうにそうやって不思議なお話し会をしていました...

ときおり

ベッドでスヤスヤ眠る三人の娘たちを優しく見つめながら...

朝が来ました...

たっぷりと眠り
夢から同時にさめた二人はガバッと起き上がりました

二人同時にキョロキョロとしました
そうして見つけました

はなちゃんです
＼(^_^)／♪

ジョンのふわふわの影にはなちゃんの黒い髪の毛の頭がちょこんと見えていました

「はなちゃん～♪♪♪」

ゞ(≧▽≦*)>

二人は同時に叫びました

ジョンが二人の方に 向き直り

はなちゃんも 向き直り みんなは 顔を見つめ合いました o(^▽^)o

はなちゃんは ニコニコして かわいいお手手で やはり おいでおいでを してくれました

二人はお布団を ガバッと はねのけて～

びゅーんと 飛んで～ジョンの上からはなちゃんのそばにいきました

そして三人一緒にジョンのフワフワにもたれて手を繋ぎました (ノ^^)八(^^)/ノ(ノ^^)

お母さんが卵と蜂蜜をつけたパンを ふんわりと 焼いてくれました

はなちゃんは そのパンを じ～と 見つめました

そしてお母さんの顔を また じ～と 見つめました

そしてにっこりしました

(=^▽^=)

手を前にあわせて

「頂きます」といったような感じがしました

「あれえ？」と双子は気づきました

森ではなちゃんは「頂きます」ていったのに

今は言ったような気がしただけ...

なんだろうなあ

(?_?)(?_?)

まっいっかあ

(^O^)/(^O^)/

きゃはきゃは(^O^)(^O^)♪♪♪

朝ご飯を 食べたり お着替えをしたり
していたら
お母さんが 言いました

「さて 皆さん (*^-^)* 今日のご予定は？」

「はなちゃんと遊ぶも〜ん (^O^)/」と ベティは 言いました

「はなちゃん 遊べるのかなあ？
だいじょうぶう？」と マリーは 言いました

お母さんが 言いました

「そうねえ〜
あのね〜 はなちゃんは 病気とかじゃないから 元気ですよ (*^-^)*

ただねえ 二人とおんなじようには 遊べないかもしれませんねえ...
もしも お前たちさえ よかったら 野イチゴ摘みに 一緒に いてくれるかしらあ???

「わあ〜い(≧▽≦)いくう〜」
「いきまあす〜 ム(≧▽≦*)>」

二人は 大はしゃぎです

はなちゃんの手を取って 一緒に ランランラン♪を しました〜
o(^o)(o^^)oo(^o)♪

森とは 違う場所に 野イチゴ畑がありました
お母さんが 見つけた 素敵な秘密の場所です

お母さんは ランチを バスケットに 詰めて 大きめの 毛布を クルクル丸めて 持ちました

双子には いつもの バケツを 渡しました

ジョンの頭をなでながら「ジョン... お願いしますね」 そう言ってお母さんははなちゃんをジョンの背中に座らせました

はなちゃんは上手にジョンの背中にちょこんと座りました

ジョンは とても 静かにしっかりと歩きました
前を向いて堂々と歩きました

双子は なんだか とても 幸せな気分になりました

ジョンの周りを飛び跳ねながらぐるぐるまわりました

「おやくそくう〜♪
おやくそくう〜♪
みんなと一緒に出かけますう〜♪
野イチゴ畑に 出かけますう〜♪
ランランランラン♪ランランラン〜♪」

ベティが歌い出しましたo(^▽^)o

マリーも 続いて歌い出しました

「思い出すう〜♪
思い出すう〜♪
みんなと一緒に 思い出すう〜♪
とお〜い お宇宙(そら)のおやくそくう〜♪
ランランランランランラン♪〜」
o(^▽^)o

お母さんは微笑みながらも 目にうっすらと涙を浮かべ そんな三人をながめていました

野イチゴ畑では 可愛い小さな野イチゴたちが いっぱい いっぱい みんなをむかえてくれました

「いらっしゃーいませ〜 \ (^_^\) / 摘んで〜 摘んで〜 たべてみてみて〜」
いっせいに言っていました〜♪

マリーは「ありがとうね ありがとうねo(^▽^o)」といいながらたくさん摘みました

ベティは「もぐもぐ ありがとうね もぐもぐ」(^ε^)とたべたべしながら言いました

はなちゃんはじっと野イチゴたちを見ていました

そして頭をユラユラし始めました

可愛いお手手をパタパタしながら野イチゴたちとお話ししているみたいに笑っています

黄色い蝶々がヒラヒラと飛んできました

花びらが舞ってきました

小鳥たちが飛んできて歌い始めました

高い空で大きな鳥がクルクルと輪を描いて綺麗に飛んでいました

いっぱいイチゴを摘んで

たくさんお歌を歌いました

お母さんがこさえてくれたサンドイッチをたべました

いつもよりハーブがたくさん入ってました

はなちゃんが美味しそうにもぐもぐしてくれたので双子もお母さんもとても嬉しくなりました

大きく広げた毛布の上でゴロゴロ遊びました

ゴロゴロしていると眠たくなりました

いつの間にか双子はお花畑に埋もれていました

二人でキョロキョロしました

見たことのない景色でしたがなんだか懐かしい森の中のお花畑でした

二人は 歩き始めました

どんどんいくと すこし 開けた 場所にでました

初めてみる お家がありました

高い足場の上に 木で丁寧に作った 綺麗な 小さな お家です

いくつか 同じように 家がありました

二人は そのうちの 一つの家に入ってみたくなりました

家の 正面には 階段がありました

こっそり のぼってみました

扉は あいていて 柔らかい 布が 風にヒラヒラゆれていて なんだか いい香りが していました

中には 入ってみました

不思議な 様子でした

真ん中に フワフワした いい香りの 床が しつらえてありました

壁には 綺麗な模様が 織り込んだ 布が 掛けてありました

丁寧に 彫り込みを施した 台がいくつか おいてありました

いい香りは そこから 香っていました

うっすらと 煙が 揺らいでいました

真ん中に 誰かが 座っていました

長い綺麗な黒髪が ツヤツヤ輝いていました

手を 胸の前であわして 目を 閉じて じっとしていました

双子は そっと 前に まわりました

しばらく顔をながめていました

どこかで見たことがある

胸がキュンとしてきました

「はなちゃん...？」二人はほぼ同時につぶやきました

つづく...

髪の長い女の人が静かに目を開けました

綺麗な黒い瞳でじっと双子を見つめました

少しも驚いた様子がなくてまるで約束をして訪ねてきたお友達を見つめるように微笑みながらじっと双子を見ていました

黒い綺麗な瞳にキラキラした光が見えて一筋涙のしずくがこぼれました

双子もいつのまにかポロポロ涙が出てきました

悲しくなんてなんにもないのです

胸がキュンとするのです

双子は女の人のお膝に顔をうずめて泣きました...

優しく髪をなでてもらうと柔らかい気持ちになりました

顔をあげました

するとはなちゃんみたいな女の人が壁を指差しました

そこにはさっきのいい香りが揺らぐ綺麗な器と小さな祭壇のようなものがおいてありました

「あっ...あれは」マリーが気づきました

「お母さんがお薬をなおしているお部屋の窓辺にしている小さな祭壇みたいなものとおんなじ...

書いてある模様がおんなじみたいだ...」

マリーにはそこに書いてある模様がなんなのかはまだわかりませんでした

そこにはこう書いてありました

... 命の秘密の守り人... 水の一族...

あまりにもきれいな文字なのでまるで美しい模様のように見えるのです
古い 古い はるかかなたの昔には たしかに 使われていた 力を 秘めた 魔法の 文字でした

水の一族は お役目がありました

水には いろんな 記憶が 転写されていました
水には 曲がらずに 記憶が 写し込まれるという 特別な 力があるからです

ただし 純粋な 水でないといけません
水の一族は 純粋な 水を守るのが お役目です

だから きれいな 水が 生まれつづける 神様のお山のそばに 暮らしています
お山から 流れてくる お水で みんなは 暮らします

お水が 染み込んだ 命を 頂きます

お水で 染めた 深い青い 衣装を身にまといます

そして 一年に一度 すべての 命をお水で 洗い流します

そうやって また うまれかわるのを 繰り返します

一族に 神様のお使いが 産まれてくるまでは そうやって 一族の水を 純粋に 保ちます

やがて 約束された 日に 神様からの 贈り人が 授けられます

命をかけて 産み落とされた 尊い 命です

産まれたときに すぐにわかります

体の どこかに おしるしがあるからです

多くの みんなと すこしばかり 違う 形で 示されるからです

贈り人は ... 神様からの声をまっすぐに受け取ります

そしてその声にひめられた秘密を心で伝えます

すべての命の深い場所に届かせるためにはそれがもっとも素晴らしい方法だからです

暗い ... 荒々しい心を育ててしまった人には気付くことができません...

そのような人からは そうやって守られていきます

またさまざまな見えない姿をしたお仲間たちがさまざまなやり方で見えないようにベールをかけて守ります

この星のいくつかの場所にあるおへそのような特別なところに点々とそのような隠された「守られ所」があります

いつか約束された魔法解除の日まで丁寧にかくされながら ... 秘密の守り人達は静かに静かに伝えていくのです...

子孫へ... 子孫へ...

未来をいきる大切な子どもたちへ...

「はっくちゅん(*^o^*)」 ベティのおっきなくしゃみでいっぺんに目がさめました

目がさめた双子は今みた夢をはなちゃんに話そうとしました

「あれえ～？ はなちゃん～ どこ隠れんぼ？ (?_?)」 ベティはお母さんにたずねました

お母さんはお片付けしながら言いました

「さっきね ...

お迎えのアオイさんがこられたの...

はなちゃんね 眠っていたからね さようなら 出来なかったのねえ ... (*^_^*)」

「なあんだあ～ お迎えきちゃったあんだあ～ (^～^)ふう～ん」

三人は 野イチゴをいっぱい 持って お家に 帰りました

帰りながら 双子は 夢のお話をお母さんにしました

お母さんは 静かに うなずきながら 聞いてくれました

「また二人とも一緒に 夢の世界に いったのね...

その女の人 は はなちゃんによく 似ていたんだね...」

「うん... あのね お耳がね はなちゃんとおんなじにね 可愛く 閉じてた～
指もね おんなじ形で しろくて 細かったよ～」

その夜... お父さんは すこし 早い時間に 帰ってきてくれました

双子はお父さんにも すぐに 昼間の楽しい お話しを 全部 しました

お父さんは お母さんを見て 微笑みながら うなずきました ...

「大丈夫かい ... お母さん？」

「ありがとう... (*^_^*) 大丈夫ですよ ... あなた...

どうぞ二人に 教えてあげてくださいな...」

「さあて... 愛おしい 私たちのお姫様たち ...

大好きなお友達 はなちゃんのお話しを 聞きたいかなあ？」

「きゃあ～ \ (^_^) / ききたあい～♪」

「いやあ～ん ききたあい ♪(*^・^)/ノ☆」

二人は はしゃぎました

いつもの場所にはしっていきました
足をブラブラさせてお父さんを待ちました

お母さんが こさえてくれた 暖かい 飲み頃のお茶を もらって ワクワクしました

「さてお前たち...
はなちゃんのお耳やお手手や言葉を話さない事をお前たちはどんな風に思っていますか？
お父さんに教えてくれるかな？」

「はなちゃんのお耳？ かわいいよ～(^O^)/
お手手も かわいいよ～」

「言葉あ？ はなちゃん 小さい声でお話しすこしするよ どうして？」
(?_?)(?_?)

「うん...
あのね はなちゃんね 心でお話ししているんだよ
はなちゃんの心の声をお前たちは心で聞いていたんだよ

わかるかな

すこしむずかしいかな」

「お口でお話ししないの?(?_?) どうして？」

「うん はなちゃんね お約束をしてね 生まれてきてくれたんだよ べ(´ー`)

命たちはね元々は みんなひとつの大きな丸だったんだよ
それがね いろんな遊びを それぞれに しようねって 決めて あちらこちらに 散らばっていったん
だよ

みんな その 散らばった 小さな つぶつぶなんだよ

はなちゃんはね

耳をふさいで人からの声が聞こえなくて口から声がだせないんだよ
それはね... 神様からの音をまっすぐに聞くためのお約束だったんだよ

はなちゃんはね 指の形がすこしばかりみんなと違ったり足がみんなみたいには使えないから
立ったり歩いたりはできないんだよ

それはね じっと座って大地からの音を全身で聞き取ったり聞いた音を空気の中に伝えること
がまっすぐできるためのお約束なんだよ

はなちゃんはね お前たちみたいに

話したり
歌ったり
踊ったりは
けしてできないんだよ

はなちゃんはね

生まれるかわりに
お母さんを神様の世界にお返しするお約束をしてきたんだよ

だからね はなちゃんは...

はなちゃんはね...

(ノ_・。)

お母さんから一度も抱っこされたことがないんだよ...」

お父さんは静かに涙を流しました

お母さんはタオルで顔を隠しながらエプロンをぎゅっとにぎっていました

二人は胸がキュンとしてきました

はなちゃんは一度も たったことがありませんでした

いつも かわいいお手手で おいでおいでを していました

つづく...

双子たちははなちゃんがいつもとても幸せそうな笑顔でいるので
はなちゃんが歩けないことや聞こえないことや話していなかったことなどに少しも気付か
ませんでした...

「お父さん... 明日またはなちゃんと遊べる？」 ベティは少しドキドキしてきたのでた
まらずお父さんにたずねました ...

「あのね...
はなちゃんはお家に帰るお舟にもう乗ったんだよ

探しにきたものをもう見つけたからね ...

はなちゃんはねあの森で約束があったんだよ
はなちゃんはねお前たちのように夢の世界へ自由にいくことができるんだよ

そこであの森を見つけたんだよ

お前たちに会うために...
はなちゃんはお舟にのって長い長い旅をしてきてくれたんだよ」

双子たちはもうドキドキをがまんできなくなりました

わあわあと... 泣き出しました

お母さんが優しく二人を抱きしめました

お父さんも一緒に泣きました

四人はまあるくなりました ...

「優しい娘たちよ覚えておいてくれるかい...
この世界にはね... はなちゃんとおんなじような子どもたちがあちらこちらに
いるんだよ

はなちゃんたちはね

世界中の命のバランスをとってくれているんだよ

「痛い思いを私にください
寂しい思いを私がしましょう

あなたのかわりに私にひきうけさせてください」

そう決めてから少し不自由な体という形でうまれてきてくれてるんだよ
そしてねみんなそんな不自由の中で奇跡みたいな秘密に気づいているんだよ

「痛い体にありがとう...
寂しい思いにありがとう...」

はなちゃんたちはねいつもそういつているんだよ

お月様に 見守られて
お日様に 励まされて
たくさんの優しい大人たちに 愛されているのを しっているんだよ ...

心で話す子どもたちの声を聞くことができる お前たちをお父さんも お母さんも 誇りに 思っているよ ...

ありがとう ...

マリー

ありがとう

ベティ」

泣きつかれて 眠りについた 二人の髪をお父さんは いつまでも撫でていました...

「ありがとうございます...
神様... この子たちを 私たちの 思いを超えた 場所でも いつも 守ってくださっていることに 感謝

しています

私たちはこの子たちとすべての命を守り続けます

丁寧に優しい言霊を紡いで放ちます...

時が満ちるその日まで

けして急がず

けして諦めず

喜びと感謝とともに笑いを絶やさず平和と調和を毎日淡々と積み重ねていきます

すべての奇跡に感謝いたします」

お母さんはお薬のお部屋の祭壇の前で静かに手を合わせていました

「一族の皆さん... とうとう会えました

古い... 古い... お仲間でした

懐かしくて魂が震えました...

娘たちとの約束を果たしにきてくれました

森にみずの刻印を残してくださいました...

私たちの秘密も分かち合いました

遠いアオイ様の土地に私たちの木の刻印が刻まれることでしょう

あの二人は夢の世界で私たちがけしてたずねることのできない

未来のアオイ様の一族のあの土地に飛びました...

お花様に会うために...」

お母さんの瞳からキラキラと涙がこぼれました...

祭壇には 綺麗な文字が 刻まれていました

...命の秘密の守り人... 木の一族...

おわり...